

『魏志』倭人伝と『日本書紀』

蛭田喬樹

報せてからで、それまでは倭国は一

『魏志』倭人伝と『日本書紀』(以下『書紀』)は『ナゾの書』と呼ばれ、なかなか解読できない。この二書が関係するなどといったら、変人扱いされそう。しかし、不便なことがある。「倭国」の範囲がはっきりしないのだ。とくに邪馬台国は九州であるとか、いまの奈良県の辺り(とりあえず大和としておく)だとか、あるいは岡山だとか、いろいろな地に比定されるが、いまだに定説はない。対馬国から奴国・不弥国は、辺までは九州として間違いないが、邪馬台国は「倭国」の一国であるから、この位置が決まらないと「倭国」の範囲が決まらないのである。その点、中国では『魏志』の「倭国」は九州にあり、邪馬台国も同じ地域にあるとして、倭国(九州)と倭国(大和)を分けている。もともこのように分かれたのは648年に倭国(九州)の使者が唐を訪れ、実状を

つしかなかつたようだ。日本史を正しく理解するためには、『宋書』『隋書』『唐書』と言った中国史書のお世話になることが多い。「倭国」の範囲を中国と一致させておくことが欠かせない。

1 国書不提出事件

220年に後漢が滅び、群雄が割拠する中国を360年ぶりに統一したのが隋(581~617)である。607年、倭の遣隋使小野妹子が帰国の際、隋の使者裴世清と同道したが、途中百済に国書を奪われるという事件が起きた。大切な国書を奪われるとはと、使者小野を遠島にする案も出されたが、聖徳太子のとりなしで何事もなく済んだ。

隋煬帝の積極政策が仇となって隋が滅び、唐となったのが618年である。632年、倭の遣唐使犬上御田歙の帰路に同行したのが唐使高表仁だが、難波津で一悶着あった

らしい。『書紀』はとくに記していないが『旧唐書』には「表仁、綏遠の才なく、王子と礼を争い、朝命を宣べずして還る」とある。

この二つの事件は関係がないように思われているが、同じ理由による「国書不提出」事件と見られる。これは国書を盗まれたり、礼を欠いたからではない。中国皇帝が下した国書を、唐の使者が相手の国王に渡さなかった事件である。なぜか。それは、皇帝は倭国（九州）の王に渡すよう下命したのだが、使者は倭国（大和）の国王のもとに連れて行かれたため、使者としては国書を渡すわけにはいかなかったのである。『隋書』に「大和（日本）」は登場しない。『旧唐書』で倭国（九州）と倭国（日本）を分け、高表仁を派遣したのは倭国（九州）であると明記している。国書に書かれた宛名は隋・唐とも「倭国王」だったのでろう。同じ「倭国王」であっても違うのわかる使者としては「日本国王」に渡すことは出来なかった。彼らには「国書盗難」とか「綏遠なし」と言う批難を受けようとも「使者の使命」は護ったのである。

2 『宋書』の記事削除

古代の日本は中国に接する場合、

全て「倭国」を名乗っていたのだから。あるいは、黙っていると「倭国」とされたのか、いずれにしても倭人⇨倭国とされていたようだ。大和に征服された倭国（九州）は、その後も折に触れて中国北朝には使者を送っていたようだ。600年・610年の隋、648年の唐への遣使は倭国（大和）ではなく、倭国（九州）からと推定している。

宋（劉宋420～478）から斉（479～501）・梁（502～556）と遣使していたと『宋書』に書かれた讚（仁徳）⇨武（雄略、武烈）が『書紀』に現れず、雄略のみが既に滅んでいる呉国（222～280）と交流したことが記されている。『書紀』に拠れば、武⇨雄略とするのは誤りになるが、これは『書紀』の造作で、『宋書』が正しい。

なぜ、このような造作がおこなわれているのかだが、天武・持統は702年遣使の際、唐に対して歴史を提出しているらしい。その中で唐に對し言い訳をしているのである。

『宋書』に出てくる倭国は、われわれ日本とは関係のない倭国がおこなったことで、倭国（大和）では南朝に朝貢していないと。そのため、

『宋書』の記載する倭国遣使の記事は全て『書紀』から削除し、倭国（大和）が関わったのは呉国が交流を求めてきたことのみとして、遣使した年度も違う雄略紀のみ載せたのである。

3 『隋書』、『唐書』の記事

次に『隋書』と『唐書』の記事を表に掲げたので見ていただく。

『隋書』と『旧唐書』の記す『倭国』は「[東西五月行](#)、[南北は三月行](#)」で一致しているから、同じ国である。そして、『隋書』では「倭国」しかない。「日本国」は『旧唐書』で始

めて登場するが、表にはない702年遣使以降の登場であって、それ以前は倭国しか出てこない。『旧唐書』が「倭国」と『日本国』を分けて記しているのを、日本の学者は「倭国と日本を併記するような不体裁」（中国衛視日本伝 石原道博編訳 岩波文庫）としているが、これは編者が邪馬台国大和説なのであって、『旧唐書』の方が正しいと思われる。

4 『日本書紀』の紀年延長

次に『書紀』との関係について述べておく。『書紀』の紀年が延長されているのは知られていることだが、なぜ延長されたのかとなると、誰も、何にも言わない。わたしの考

えを書いておくが、詳細を書くとは長くなるので、要点だけにしておく。

663年、倭国（大和）は百濟復興のため、唐・新羅連合軍と朝鮮の白村江で戦い、大敗した。この戦後処理交渉と702年遣使において「①唐は魏の後継国である。②魏の冊封国である倭国（九州）を攻撃する意図は無い。③倭国（大和）が倭国（九州）の一国であるなら証拠として国史を提出せよ。そうすれば唐は日本を攻撃しないと告げたと見られる。

唐からの攻撃を避けるため、倭国（大和）では神功皇后（363）389）を『魏志』の倭国女王卑弥呼（240年頃活躍）に擬定した史書をつくった。神功の紀年繰り上げに伴い、他の天皇の紀年も繰り上げた。これが『書紀』紀年を延長した理由である。日本歴史の紀年を繰り上げるを得なかったことは、倭国（九州）と倭国（大和≡日本）は異なる国であった、つまり邪馬台国は九州にあったことを示している。

5 『日本紀』と『日本書紀』

『書紀』は唐に見せるために作られた史書であり、日本では馴染みのない北方韻漢語で書かれている。そのお陰か、唐が攻めてくることもなく、

『旧唐書』では倭国（九州）と日本（倭国ヤマト）は別国とされていたのが『新唐書』では倭国＝九州＋ヤマト＝日本に変わっている。つまり日本が倭国を呑み込んだのが、倭国が日本を呑み込んだことになり、名前だけは「日本」を使っているときに『書紀』は完成したときは『日本紀』であったが、間もなく「書」が加えられ『日本書紀』と呼ばれるようになった。自然に変わったのではなく、上からの命令で変えられたようである。『日本紀』では据わりが悪いので、「書」を加えて『日本書紀』としたのではないかと思っっている。因みに、『続日本紀』は造作されていないせいも、そのまま『続日本紀』と呼ばれる。『続日本書紀』ではない。（完）

表 『隋書』『旧唐書』の記す

倭・日本

『隋書』

倭国は百済・新羅の東南に在り。水陸三千里、大海の中において山島によつて居る。魏の時、訳を中国に通ずるもの三十余国あり。（中略）。その国境は東西五月行、南北は三月行にして、各おの海に至る。その地勢は東高くして西下る。邪摩堆に都す。則ち『魏志』のいわゆる邪馬臺なる者なり。古いう、「楽浪郡境及び帶方郡を去ること并に一万二千里にして、会稽の東に在り、儋耳と相近し」と。

『旧唐書』倭国伝

倭国は古の倭奴国なり。京師を去ること一万四千里、新羅東南の大海の中にあり、山島に依つて居る。東西は五月行、南北は三月行。世々中国と通ず。その国、居るに城郭なく、紀を以て柵を為り、草を以て屋を為る。四面に小島、五十余国あり、皆焉れに附属す。

『旧唐書』日本国伝

日本国は倭国の別種なり。（中略）その国の界。東西南北各々数千里あり、西界南界は咸な大海に至り、東界北界は大山ありて限りをなし、山外は即ち毛人の国なりと。